The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヒュームの懐疑論と物体の存在
Author(s)	中谷, 隆雄
Citation	哲学論叢. 1985, 16, p. 193-207
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66836
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヒュームの懐疑論と物体の存在

中谷隆雄

一

『人性論』[1] 第一巻第四部「哲学の懐疑論的体系等について」の第五節は次の様に始まる。

「非常に明晰で確定的だと推察される外的対象についてのあらゆる体系に、そして物質の観念に以上の矛盾と困難を見出したので、ずっと曖昧だと推察されがちな内的知覚についてのあらゆる仮説に、そして心の本性に私達はおのずと更にやっかいな困難と矛盾を予期するであろう。」(232)

第二節から始まった物質界についての話が前節で終わり、この節から精神界についての話が始まろうとしていることが判る。即ち第二節から第四節まで外的対象というひとつの主題が扱われていたことになる。ただ従来は、そのうちの第二節が中心的であって、第三節第四節は補足的と考えられる傾向にあった。それにはそれ相応の理由があった。まず題名である。第二節は「感官に関する懐疑論について」、第三節は「古代哲学について」、第四節は「現代哲学について」と題されていて、第二節と第三節の間で区切りたくなる。そして第二節は他の二つの節（共

に七頁）に比して極めて長く（三十二頁）、しかもその終末部分が結論めいた内容になっている。しかし果たしてそう区切るべきか。『人性論』第一巻の最終の節「この巻の結論」にヒュームが話を振返って外的対象についての議論を概括する部分がある。そこでヒュームは次の様に言っている。

「この不定で人を惑わす原理[2]に様々な仕方で絶対的に従うとき（実際従わねばならないのだが）、誤りに導かれるからと言って不思議ではない。因果の推理をさせるのはこの原理である。感官に現前しない外的対象の連続存在を確信させるのも同じ原理である。この二つの作用は等しく人間の心に於て自然で必然的であるが、或るいくつかの場合に両者は全く相反する。[1]即ち因果の推理を正しくかつ規則的に行い、同時に物質の連続存在を信じることは不可能である。」（265—7）

原注1でヒュームは第四部第四節を指している。ブリックはこの事実を捕え、従来の見方に変更を迫る。[3]従来の見方からすれば、物体についての核心的な話は第二節で終わっているので、原注1は第二節を指すべきはずである。にもかかわらず実際は第四節を指している。このことは外的対象に対するヒュームの懐疑論的攻撃が第四節に至ってはじめて完了することを意味する、とブリックは言う。それ以前にこのパッセージの内容そのものが第四節の結論（後述）であって、第二節の結論ではない。しかも最終節で他に外的対象に言及していない。むしろこの事実の方がブリックの説をより強い形で支持する様に思える。ともかく、外的対象に対する懐疑論は第四節まで続くというブリックの仮説を以下に検証してみたい。

ブリックに従えば、第二節で話を終わらせることはできない。だからと言って第二節から第三節へ話をつなぐこともできない。（そのこともあって第三節以下が補足的とみられるのであろう。）しかし第二節から第四節へなら話

をつなぐことができる。第四節では第一・第二性質の説が登場する。そしてこの説が成立するのは、色、音、味、におい、熱さ（第二性質）の印象が感官の状態に依存する故である、という。例えば、

「様々な健康状態に依存する。病気の人は以前に極めて良い味のした肉に不快な味を覚える。人々の様々な体調や体質に依存する。ある人に甘いものが他の人には苦く思える。外的な状態や位置の相違に依存する。雲から反射した色は雲の距離により、そして雲が眼と発光体で作る角度により変化する。さらに火はある距離では快の感覚を伝えるが、他の距離では苦痛の感覚を伝える。」(226)

しかしこの様な知覚の相対性のみから直ちに第一・第二性質の説が生じるわけではない。前提として表象説というものが存在して、そこへ知覚の相対性による議論が適用されることによってはじめて第一・第二性質の説が生じる。そして表象説がいかにして生じるかの記述が第二節にある。かくして第二節から第四節へと話がつながる。

そうすると第三節が抜ける。第三節でもやはり外的対象が扱われている。そのひとつは「実体あるいは原初的な第一質料」である。ある対象の継起的な変化を漸次に追うと、その対象は不変だ（unchangeable）とみなされる。しかしかなり変化した後に対象の状態を比較すると、その対象は多様（diversity）とみなされる。見方によって同じ対象が不変であったり多様であったりする。「この矛盾を解消するために、想像力は、そうした変化すべてを通じて同じと想定され、知られず見えない何かを捏造しがちである。そしてこの理解できない何かを想像力は実体あるいは原初的な第一質料（a substance, or original and first matter）と呼ぶ。」(220) もうひとつは「原初的な実体あるいは物質」である。桃とかメロンを構成している色、味、形、固さその他の諸性質は緊密に関係していて、完全に非複合的であるかの様に心に作用する。それ故にそれらの諸性質はひとつの事物とみなされる。しかし別の

観点から見れば、それらの諸性質は互いに異なり、区別でき、そして分離できる。見方によって同じ対象が単純であったり複合的であったりする。この矛盾を解消するために、想像力は、「それらの性質の間の結合の原理あるいは凝集の原理として、あるいは多様性や複合性にもかかわらずひとつの事物と呼ばれる資格を複合的な事物に与えるものとして、知られない何か即ち原初的な実体あるいは物質（original substance and matter）を捏造する」(221)。第三節は確かに以上二つの外的対象の体系(system)を含んではいる。しかし同節は前後の節とは次元を異にする様に思える。それは単に話がつながらないという消極的な理由のみからではない。積極的な理由が別にある。それは第三節の体系が前後の節の体系に比して水準が低いということである。水準の相違は想像力に由来する。第四節の始めでヒュームは想像力について語っている。

「自己弁明するために私は想像力のうちに永続的で抗えず普遍的な原理(4)（the principles which are permanent, irresistable, and universal）、例えば原因から結果へのそして結果から原因への習慣的移行と、変わり易くて弱く不規則な原理（the principles, which are changeable, weak, and irregular）、例えば私がたった今注意を払った原理を区別しなくてはならない。前者は私達の思惟と行動すべての基礎であって、除去されると人間本性はたちどころに朽ちて滅んでしまうに違いない。後者は人類にとって不可避でなく、生活の遂行に必要でもなく有益ですらない。むしろ逆にただ弱い心にのみ生じることが観察され、習慣や推理に属する他の諸原理に対立すると、しかるべき対照と対置によって容易に打ち倒されてしまうであろう。」(225)

ヒュームがここで、第四節の体系は想像力の「永続的で抗えず普遍的な原理」に属し、第三節の体系は「変わり易くて弱く不規則な原理」に属すると言わんとしていることはコンテキスト(226)から明らかである。これで第二

節の体系が想像力の「永続的な原理」に属すと言えれば、第二節から第四節へ読みつなぐべき積極的な理由が示せたことになる。残念ながらヒューム自身そのことについて明言していない。しかし第二節の体系はその性格から、あるいはその形成過程から「永続的な原理」になるはずである。

二

山、家、樹木などの知覚対象を見ていて、一時的に眼を閉じて見ることを中断し、そして再び眼を開いたとする。そのとき中断前の知覚対象と中断後の知覚対象は極めて類似している（194—5, cf. 204）。それゆえに両者を同一とみなしたくなる。しかしやはり両者は中断ゆえに別個であり、別個ゆえに同一ではない。それでも中断前後の類似性は過去に於て無数に観察されているので、[5] 同一視しないわけには行かない。この矛盾[6]を解消しようとして想像力は連続存在という虚構（fiction）を捏造する（feign）（205, cf. 208, 209）。（捏造するだけでなく信じる（208））これが第二節の体系のひとつである。まずこの体系を想像力の「永続的で普遍的な原理」と考えたい。なぜならそれが俗衆（vulgar）のものだからである。俗衆は「冷静で深遠な反省」は行わず、「一種の本能あるいは自然的な衝動」に従う（214）。そういう俗衆の作った体系は少なくとも普遍的にはなる。「冷静で深遠な反省」を行う哲学者ですら、「書斎を離れると」俗衆の体系に従わざるを得ない（216 ,214）からである。それゆえ、「想像力の自然的な傾向性」（210）によって生まれるとも言われる俗衆の体系はやはり「永続的な原理」に分類すべきであろう。

俗衆の体系から第二節のもうひとつの体系が生じる。例えば「片眼を指で押すと、すべての対象が二重になり、片方が通常の自然な位置から移動するのが知覚される」（210）。また対象は距離によって違った大きさに見えたり、

角度によって違った形に見えたりする。病気をすれば対象の色その他の性質が変化する（211）。要するに知覚対象は感覚器官の状態に依存（dependent）している。即ち知覚対象は独立的（independent）でない（210）。ところで知覚対象の独立存在はその連続存在を含意する（逆もまた真）という前提がヒュームにはある（188）。従って右の事実は知覚対象の連続存在を否定する。しかし知覚対象の連続存在という考え（opinion）は（多分信念にまで至っている故に）想像力に深く根差している（214）ので、それを否定する事実があるからと言って、取り下げることはできない（214）。理性は連続存在を否定するが、想像力は理性に従わない（215）。この矛盾を解消するために、再び想像力が登場して、対象と知覚（object and perception）の二重存在という虚構を捏造する。この虚構は哲学者の体系と呼ばれる。哲学者の体系は「知覚に中断を、そして対象に連続性を」（215）帰し、その結果、「私達の依存的な知覚が中断していて相異なることを認める点で理性を喜ばし、そして同時に対象と呼ばれる他の何かに連続存在を帰す点で想像力に快適である」（215）、という。

ただヒューム自身の言明とは裏腹に哲学者の体系は理性と想像力の要求を等しく満たしている様には思えない。共に知覚についての要求であったはずである。確かに哲学者の体系の言う中断は知覚の中断であるが、連続存在の方は対象の連続存在である。それゆえに哲学者の体系は理性優先の体系の様に思える。にもかかわらず哲学者の体系が理性と想像力を等しく満足させるかの様にヒュームが言うのは、連続存在を帰せられた対象が―第三節の「知られない何か」と違って―知覚と無縁でないと考えていたからではないか。対象は知覚の原因である、とヒュームは後述している（216―7）。いつ、どの様に両者に因果関係が帰せられるかの記述がないが、哲学者の体系が形成されるとき、同時に因果関係が帰せられると考えることができる。中断の前後でなぜ知覚が類似するかを説明しな

くてはならないという要請がヒュームにあったと仮定すればよい。俗衆の体系では知覚対象そのものが連続存在するので、中断の前後の類似性に説明は不要である。しかし哲学者の体系では知覚は連続存在していない。そこで連続存在が帰せられる対象が同時に知覚の原因であるとする。そうすれば、知覚内容が似ているのは、それが同じ対象を原因とする結果だからであると説明できる。この様に二重存在の虚構が形成された時点ですでに対象は知覚にかかわるものであった。そしてそれがためにヒュームは理性と想像力の言い分を等しく聞き入れたかの様に言い得たのではないか。

知覚と対象の間にあるのは因果関係だけではない。

「原因と結果の関係によって類似の関係を加えざるを得なくなる。これらの存在（対象と知覚）は前者によってすでに想像力のうちで結合されているので、私達はその結合を完全にするために自然的に後者を加える。以前に何らかの観念の間で観察した関係に新しい関係を加えることによってあらゆる関係を完全にしようとする強い傾向性が私達にはある。」(217)（括弧内筆者）

すでに因果の関係にある対象と知覚の関係をさらに完全にしようとして想像力（216—7）は両者に類似関係を帰す。かくして哲学者の体系は表象説（the representative theory of perception）（以下「表象説」で知覚の因果説も含む）として完成する。この哲学者の体系もやはり想像力の「永続的な原理」に分類できる。哲学者の体系は古代哲学の体系と違って想像力がじかに作ったものではない。じかに作ろうと思っても課題が余りに抽象的でできない(211)。あらかじめ俗衆の体系があり、そこに知覚対象の独立存在を否定する事実が提示され、想像力は余儀なく二重存在の虚構を作ることになる（211、213—4）。そして想像力は更にその「強い傾向性」によって対象と知覚の

間に類似関係を帰す。この様な形成過程からして、俗衆の体系が想像力の「永続的な原理」なら、哲学者の体系もそうであろう。逆に考えてもよい。第四節の第一・第二性質の虚構は「永続的な原理」に属する。そしてそれは知覚の相対性による議論によって表象説から生まれる。即ちそれは表象説を基礎とする派生物である。基礎を「弱い原理」とし、その派生物を「永続的な原理」とするのは合理的でない。だとすれば、基礎たる哲学者の体系も「永続的な原理」とみなすべきであろう。結局第二節と第四節の体系は「永続的な原理」に、第三節の体系は「弱い原理」に属することになる。(7)

三

第三節を省けば話がつながるというだけではない。第二節から第四節へと読み続ければ、ヒュームの懐疑論がより徹底的で組織的に思えてくる。最初、「私達にとって、感官に現前する心像(8)(image)そのものが実在の物体である。そして私達が完全な同一性を帰すのはそれら中断した心像である」(205)。しかし心像の「出現が中断することは同一性に反する様に思える」(205)。これが最初の懐疑である。想像力は同一性と中断の矛盾を解消しようとして知覚対象の連続存在という虚構(俗衆の体系)を作る。そこへ連続存在を否定する事実が提示される。これが第二の懐疑である。想像力は連続存在の主張とその否定という矛盾を解消しようとして表象説の虚構(哲学者の体系)を作る。それに対し、ある種の性質(例えば味)はひとつの対象から相異なる印象(甘さと苦さ)が得られるという事実(知覚の相対性)が提示される。これが第三の懐疑である。表象説では印象は対象の性質に類似するので、いくつかの性質については、その各々が同時に相異なる状態にあることになる。しかし「外的対象というのは

どういう形で現れるにせよ（to all appearance）同じままである」（226）、その性質はすべてひとつの定まった状態になくてはならない。この矛盾を解消するために想像力は第一性質と第二性質を区分する。[9] この虚構（現代哲学の体系）に於ては、知覚の相対性が指摘される色、味、におい、熱さ冷たさ（第二性質）の印象は外的な原型（archetype）を持つ必要がない。またそれゆえにそれらは連続存在しない。結局外的対象を構成するのは延長、固性、そして両者の混合体（mixtures）あるいは変容態（modifications）である形、運動、重力、凝集（第一性質）のみになる」（227）。

最後に第一・第二性質の区分は「極めて決定的な」（227）反対論によって「極端な懐疑論（extravagant scepticism）」（228）に至る。第一性質のうちの運動は物体なしに考えることができない。その物体は延長と固性から成る。延長の方は分割不可能な部分（indivisible parts）の複合体である。分割不可能な部分は色あるいは固性を有する。[10] 色はすでに物体から除外されている。それゆえ延長は固性に依存する。詰まる所運動も延長も固性に依存する。固性とは二つの物体がどんな力で押されても互いに侵透せず分離した別個な存在を維持することである。ここでまた「二つの物体」とは何か言わなくてはならない。そのために運動とか延長に頼れば、循環論に陥る（228—9）。即ち第一性質のみによっては循環論に陥らずに物体がどういうものであるか言うことができない。[11] かくしてヒュームは第四節を次の様に結論づける。

「この様に理性と感官の間には、あるいはもっと適切に言えば、原因と結果から形成される結論と物体の連続的で独立的な存在を確信させる結論の間には直接的で全体的な対立がある。原因と結果から推理するときには、私達は色も音も味もにおいも連続的で独立的な存在を有さないと結論づける（知覚の相対性による議論）。そ

れらの可感性質を除去すると、宇宙には連続的で独立的な存在を有するものは何も残らない。」(231)(括弧内筆者)

ブリックが指摘する様に、この結論は強すぎる。[12] 第一・第二性質の区分説を批判することによって得られる結論は物体が存在する根拠がないということであって、物体が存在しないということではない。反対論は形を変えて合計三つあるが、そのうちの二つまでは単に現代哲学の体系は物体(あるいは物質)の観念を与えることができないとしかヒュームは結論づけていない(229)。あるいは「極端な懐疑論」を強調しようとして勢いが余ったのかもしれない。

ここでその「極端な懐疑論」に至る過程を可能な限り単純化してみよう。まず最初、物体には完全な同一性がある。それに対して懐疑論が知覚の中断という事実を示す。すると矛盾が生じる。この矛盾を解消するために想像力は俗衆の体系を作る。それに対して懐疑論は知覚対象の独立存在を否定する事実を示す。するとまた矛盾が生じる。この矛盾を解消するために想像力は哲学者の体系を作る。それに対して懐疑論は知覚の相対性という事実を示す。すると三たび矛盾が生じる。この矛盾を解消するために想像力は現代哲学の体系を作る。そしてこの最後の体系の不整合が指摘されることによって物体が存在する根拠がなくなる。[13]「極端な懐疑論」に至る過程はこの様にヒュームにとっては矛盾という論理問題と想像力の虚構という心理問題が交錯する過程でもあった。[14] ただ第三節を省いただけで難なく右の様な図式が読み取れるというわけではない。第二節第四節を一読しただけで、図式にとって不都合に思えるパッセージが二、三見出せる。

まず第一に、表象説は第四節で懐疑論に晒される前にすでに第二節で批判されている様に思える。[15] もしそうであ

れば、第二節から第四節への橋渡しの意義は消える。対象と知覚の間には因果関係は認められない、と第二節にある。因果関係は知覚し得るものの間でのみ観察可能だからである（216, cf. 197—8, 212）。さらに想像力の性質からして（216）、哲学者が対象と知覚の類似を考えているとき、実際は対象の観念と知覚の類似を考えているにすぎない（218）、ともある。しかし対象と知覚の因果関係に関するヒュームの言い分は、それが現実に存在するための充分な根拠がないということであって、可能性として存在し得ないということではない。実際、外的対象と知覚の因果関係の可能性についてはヒューム自身後に（247—50, cf. 245）積極的に証明を試みている。また知覚と対象の類似を考えているとき、哲学者の念頭に対象の観念しかないからと言って対象が存在しないことにはならないし、知覚と対象が似ていないことにもならない。この様に第二節の批判は内容的に明らかに不徹底である。またそれは形式的にも正面切ってひとつの反対論として展開されているわけではない。結局二つの批判は、対象と知覚の因果関係を現実に認めることができ、しかも対象そのものを想像力のうちに把えることができると考える哲学者に向けられたものであって、哲学者の体系それ自体を否定する意図は元来有していない様に思える。第四節の知覚の相対性による議論が表象説と論理的に矛盾する事実を指摘するものであり、しかもヒュームがその議論を「満足の行く」（226）と形容していることを考え合わせれば、なおさらそう思える。

第二に、知覚の相対性に対するヒュームの態度に着目すると、また第二節と第四節が分断される様に思える。俗衆の体系を懐疑するときにヒュームが用いる知覚の相対性は第一性質及び第二性質についてのものである。ところが哲学者の体系即ち表象説を懐疑するとき、ヒュームは第二性質の知覚の相対性のみを用いている。なぜ両性質の知覚の相対性を用いて表象説を全面的に否定しなかったのか。そうすれば第一・第二性質の余地も残らない。しか

し実際は第二性質の相対性のみによって第一・第二性質の虚構が作られている。それゆえに第四節は別の次元の話―例えば現代哲学の紹介―[16]だと思えてくる。第二節の知覚の相対性と第四節のそれは役目が違うということに着目すべきである。前者の役目は知覚対象の独立存在を否定することである。そのためには知覚対象は感官の状態に応じてただ単に変化するだけでよい。その程度であれば第一性質についても言える。後者の役目は表象説を否定することである。そのためには知覚は単に変化するだけではなく、対象と知覚の類似性を否定する程度まで変化しなくてはならない。第二性質についてはそれが言えるが、第一性質については言えない。ヒュームにはそう思えたのではないか。だとすれば第二節と第四節を分断する必要はない。

「どういう原因で私達は物体の存在を信じる様になるのかと尋ねてもよい。しかし物体が存在するか否かを尋ねるのは無益である。それはすべての推理に於て当然のことと考えなくてはならない点である」(187)、と第二節の冒頭にある。第二節と第四節がつながるなら、探究課題はむしろ、『私達は今三つの形で物体の存在を信じているが、どういう原因のためにそういう形で物体の存在を信じる様になるのか』と言った方がより適確であろう。答えは、まず知覚対象の同一性を懐疑することによって素朴実在論が出来、素朴実在論を懐疑することによって表象説が出来、表象説を懐疑することによって第一・第二性質の説が出来る、それゆえ私達は懐疑の度合に応じて三つの形で物体の存在を信じている、となる。ところが第一・第二性質の説を懐疑すると物体の存在を証す根拠はなくなる。しかしそれでも物体は存在する。それは「すべての推理に於て当然のことと考えなくてはならない点」だからである。

以上物体との関係のみしか扱わなかったが、しかしそれだけからでもヒュームの懐疑論のひとつの側面が浮彫り

にされる様に思う。『人性論』第一巻の最終節でヒュームは、「自分の傾向性に逆おうとする場合、私はそういう抵抗に対して充分な理由を持つであろう」(270) と言っている。「傾向性」を想像力の傾向性、「抵抗」を懐疑論の行使と解してみたい。すると、想像力が物体の体系を作る度毎にその体系は懐疑されるが、それにはそれなりの理由がある、ということになる。それなりの理由とは何か。それは普遍的な真理への渇望とも称すべきものであろう。

「道徳的な善と悪の諸原理、統治の本性と基礎、そして私を動かし支配するいくつかの情念及び傾向性の原因を知りたいという好奇心を私は持たざるを得ない。どういう原理に従っているのか知ることなしに、ある対象を是認し別の対象を否認したり、ある事物を美と称し別の事物を醜と称したり、真理と虚偽、賢明さと愚かさについて決定したりしていると考えると私は不愉快である。それらの事柄すべてに於てかくも嘆かわしい無知の状態にある学問世界の状況に私は関心がある。」(271)

相反するものを説明できる普遍的な真理を知りたいという欲求がヒュームにはある。とりわけヒュームが俗衆の体系を、そして哲学者の体系を懐疑するのも同じ動機からではないか。両体系が普遍的か否かが疑われるべきだとヒュームは考える。そして俗衆の体系に対する反例として二重視等の事実が、哲学者の体系に対する反例として第二性質の知覚の相対性が提示される。内省を探究のための重要な手段とするヒュームの立場からして、普遍性への欲求はヒューム個人のものにとどまらないはずである。だとすれば、そこに由来する懐疑論についても同じことが言えよう。ただ現代哲学の体系についてはその種の懐疑が功を奏さない。それ以前に体系内の不整合が露わになるからである。かくして最後の体系も互解し、物体存在の根拠は消滅するが、それでも私達は物体の存在を信じる。これが「自然の流れ (the current of nature)」(269) である。(17)

（注）

（1）使用したテキストは David Hume, *A Treatise of Human Knowledge*. L. A. Selby-Bigge (ed.), second edition with text revised by P. H. Nidditch (Oxford, 1978)（大槻春彦訳『人生論』岩波文庫一九四八—五二年）で、引用個所、該当個所は文中に頁数のみ記した。

（2）想像力のことである（265）。

（3）J. Bricke, *Hume's Philosophy of Mind* (Princeton, 1980), pp.11—12.

（4）想像力の所産を指すのかその特性を指すのか明確でない。一応前者とみなしたが、いずれとみなしても以下の議論は成り立つと思う。プライスは特性とみている様である。H. H. Price, *Hume's Theory of the External World*,(Oxford, 1940), pp.16—7.

（5）この現象が知覚対象の恒常性（constancy）と呼ばれる(195)。

（6）心理的葛藤と称した方が適切かもしれないが、ヒュームは「矛盾」と言っている。後述の哲学者の体系も同様である。

（7）『人間知性に関する探究』(*Enquiry concerning Human Understanding*, third edition with text revised by P. H. Nidditch, (Oxford, 1974) pp. 151—5) に登場する三つの体系は、内容的にも、第二節と第四節の体系に一致する。cf. Bricke, ibid., p. 21.

（8）俗衆は心像とは思っていない。あくまでヒュームの眼から見ての話である。cf. T. Penelhum, *Hume*, (London, 1975), pp. 65—6.

（9）第三節も含めて、想像力は矛盾を解消するために登場する。その意味で外的対象の議論に於ける想像力は「知的あるいは認知的(intelletual or cognitive)」である。B. Stroud, *Hume* (London, 1977), p.108.

（10）ヒューム自身の表象論(235)の反映であろう。

（11）「哲学的な」この反論とは別に、ヒュームは「通俗的な(popular)」反論も並記している(230—1)。

（12）Bricke, ibid., p. 16.

（13）これはフォジェリンの読み方とブリックの読み方を折衷したものである。フォジェリンは発生論的な見方をするが、第三節を省いていない。ブリックは第三節を省くが、発生論的見方に着目していない。そして両者共極端な懐疑論は強調

するが、想像力に注意を向けていない。R. J. Fogelin, *Hume's Skepticism in the Treatise of Human Nature*, (London, 1985), ch. VI, VIII, Bricke, ibid., ch. I.

(14) cf. Fogelin, ibid., p. 146.

(15) cf. *Enquiry*, p. 154.

(16) もしそうなら、第四部第七節「この本の結論」に第四節の結論があの様な形で登場しないだろう。

(17) ヒュームは自然主義を確証するために懐疑論を用いている、とフォジェリンは言う。Fogelin, ibid., pp. 403—4.

(追手門学院大学非常勤講師)